

石塔石などあるは、其頃の名残なるか。讚岐守殿、若州小濱所替の時、川越より一里半、乾<sup>イナ</sup>紺谷村へ引たり。其後寛永十六、伊豆守殿領地となり、籙<sup>イナ</sup>を差置れあまた鯉鮒を放され、年々獻覽もありしと。森下甚右衛門といふ者は、是を司り、籙屋敷と稱す。其頃より段々、柿、梨子の苗木、多く植たり。美濃守殿時代、生類制禁に付、籙も相止み、夫より樹木屋敷と一統<sup>イナ</sup>申。當御代に至り、益枝葉榮り、年々獻覽も有とかや。

丸野馬場宮ノ下二千百十六坪 伊豆守殿時代

屋敷構の如くにして、内に馬場、鉄砲場あり。その余は皆畑也。屋守の家一軒ありて、國友佐五右衛門先祖預りの場也。所替後、寛永の頃、士峯山泰安寺建る。

泰安寺 開山亭海僧正万治三戊八月廿三日、二世亮覽御印天和三亥十一月十五日、三世主純法印享保十三申二月十二日、四世真梁法師享保十五戊十二月廿九日、五世義龍法印享保十七子七月三日、六世舜雄法印、七世舜慧(七世の文書入札) 余名川仙波下 一つの頃かよねと云女身を投



け此池の主と成たる由。依之與根川と云へかりしを中古あやまりてよな川と唱ひ來れり。此内に七ツ釜と云有。水草もはへかたき底しれぬ深き所七所あり。世俗に龍宮城造つ、きし定成と云其内に獅子頭など、云て蝮住し由昔より見たる者儘多し。今も霖雨又は白雨の頃などは、草苺など正に見たる由。

觀音橋清水御門東余名川の先 杉下村の道に有。小き石橋なり。昔此所に觀音堂ありし故の名なり。靈驗ある作佛の由。今仙波に安座す。

見通しの松杉下村田の中にある 松郷合仙波分の境の印松なりともいへり。伊豆守殿時代杖間打鉄砲の目當の松ともいへり。

比丘尼茶原三番町南側裏手 昔熊野派山伏の妻貞清といふ比丘尼の畑ありし故、其名有。

下水流南町 古來より此邊の水吐にて、丹波屋と云者の脇より、養壽院長喜院の境内を堺全くと養壽院境内の真中を、廟所の際より、御廐の所をさして、末は赤間川へ流落、大庭の小川程ありしか。伊豆守殿時代養壽院境内の内用地に付て以



來は寺の後にて堀留られたり。

埃捨場チリステバ南町 今穀屋次郎吉と云者屋敷也。昔は此所南町一町の塵芥捨所チリアツタなりしを、元和の頃行傳寺當所チリに引け草創の節迄は、今の大門入口の所、次郎吉先祖住居の屋敷なりしを、酒井讚岐守殿家老田中又左衛門といへる仁、差圖にて、此埃捨場の空地を彼屋敷と引替られし由、依而此大門先は南町分にて、除地にあらざる年貢地也。御花畑ウツバタ鴨町 南側町屋の裏、今小屋敷の處、元御用地にて千草万花を植られし故花畠と云。其頃

大工町の方に入口ありて、伊豆守殿時代、屋敷と成。大口町の方入口をふさぎ、鴨町の方に口を附。小屋敷二軒となる。

御鷹部屋 世俗に御鳥部屋と云。此所五ヶ村分。伊豆守殿時代公儀御鷹部屋ありて御鷹匠鈴木三郎左衛門料二百石、御鳥見仲田助作料二百石居住しせれ、御鷹も余程ありしが、元祿の頃、生類御制禁に付其節より相止み、鈴木中田の両士も江戸へ歸られ、當御代に至り又鷹部屋建。

境榎蓮馨寺前 豎門前と南門前の曲角に古木



の榎あり。昔此邊まで武藏野にて、其境の印木なり。享保の頃、朽例れたり。

堀石橋松郷と堅門前堀 是迄蓮馨寺分の堀也  
近頃迄南の角に穴ありて古き札守など捨所今は町屋と也て其跡なし。

犬小屋跡坂上 元祿の頃美濃守殿時代生類御憐の時分犬小屋の跡也今は此所に長屋有て家持仲間なと住居す

唯心庵坂上庵りと云 美濃守殿家中三東小市郎居屋敷ハ今堀内氏所と云者下屋敷也家作甚

たくわみにして築山泉水をかまへ向は田畑の眺望目をかきりにして誠に市中の閑居人間榮耀の地ともいふべし所替後唯心と云道心者しはらく住し故いつとなくかく云所々釘隠に葛の紋有是三東氏の紋所其後三東は武田安房と改てより武田菱を以定紋とす

天神前仙波新田 入口並木の所昔天神の社有今は宿の中程に幽斗のやしろ有

元塩焔藏中原の末松江分 南北七十間余東西五十間余四方に松杉の大木有て大屋敷構の如



とし中に又南北一通りの杉の並木此構の角に  
二間五間の塩硝調合所番所有しか享保三戊年  
飛火にて類焼同七寅年新宿村へ移す夫より新  
宿村を新塩硝藏と云此所元塩硝藏と云此砌鉄  
砲場の四方斗残れり此全は不残代て畑となる  
鉄砲場幅六間長七十間程左右松杉の並木近頃  
また塚真中に有しか享保の始南の末に塚を築  
六十間余の誓古場也

三ツ家御廐下御鳥屋入口長六十間 是養壽院  
門前分也御廐代地と云鷹部屋の垣を塚ひ四千

坪余有葛屋三軒有リ故かく云今以構の内の家  
居すくなく余は畑也

尾崎臺馬場幅四間長七十五間 是も伊豆守殿  
時代出来余名川の道に習ひて馬場を通し東の  
末に塚有

新屋西町 享保の頃新規に建東側九軒西側七  
軒其節西雲寺の脇通りに新道も出来たり

杉林鉦打町 元南片側小屋敷也享保三回祿後  
屋敷跡不残杉苗植今は大木となれり北側は鉦  
打町也



脇田村高四百七十石余 八幡新田西町通り大  
久保丁邊迄の惣名也

的場高沢町末 伊豆守殿時代より有し也此脇  
に小屋敷一軒有南は町屋を覆ひ北は大蓮寺の  
廟所也

的場南大手丸馬出の外芝原 伊豆守殿鉄砲見  
分の場也

的場西町末 屋敷地割の節三百坪余の所也  
阿彌陀堂前清水町入口 昔阿彌陀堂の跡也西  
雲と云道心者住て不怠念佛の地也本尊は下品

の彌陀今仙波慈惠堂に移堂は西町へ引け今西  
雲寺是也世俗御光堂と云しと也

### 妖怪

爺榎姥榎 大蓮寺の門脇古木の榎二株あり。世  
俗に爺榎姥榎といふ。享保年中門二本共に代り  
しに、此榎倒るゝ時の風に當りし集る所の人、不  
残惣身に風斑ホシの如き細かなるもの出来たり。い  
か様誰人の靈ホシの水にても有か。今寺僧に聞けば  
二本にてはなし印一本なりと云。

久太郎狐六軒町 昔此邊人里稀にして野狐多



く住みしか其内に久太郎狐とて名を得たるあり。往來の人を時としてたぶらかし、賣物なとして年をへぬ。かくする内家居建込み其後もなしとかや。遠き昔の沙汰、今は知る人も稀也。

噯姥 廣濟寺境内 一つの頃か上州厩橋出生の何某と云浪人北町に住せしに、或夜外より歸る時、彼浪人の跡より、何者とも知らず付け來る人の足音す。内へ入りて見れ共、何事もなく、不思議に思ひ、燈し火をてらしみるに、一つの石あり。其夜は何となく片付、翌日見れば何とやら石塔な

との様なりければ、俗家に置事如何と思ひ、當寺門内へ移しぬ。然るに誰となく咳カイソウの煩に、此石を繩にてからげ置けば、病平癒する事、奇なりとて、成就の時は豆煎を手タケラ向る由、供養の心なるか、是まさしく上州の噯神飛來給ふならんと專ら云傳のみにて、正説知る者なし。昔は門内カの方カに有しか近年は右の方あり。

感譽御影蓮馨寺坊中の内 慶長の頃此近き邊に嫉妬深き女あり。或夜噯シイ恚イのあまり當寺に忍入り、御影の右の頬に釘を打ち、其處を去らず、狂



氣となれり。又釘の底口より血流れし事誠に生  
たる人の如し。其後再興あれとも、終にいへす彼  
●釘の疵跡、あざの如くにある由。

虫喰奴墓法善寺 俗名瀬川嘉右衛門と云生國  
上總の者にて、伊豆守殿家中石川作右衛門とい  
ふ者の鎗持なり。常々大酒にて、あらゆる生物を  
喰ふ偏に人倫の業に離れ、生冷なる禽獸腐肉も  
いとはず、酒たにあれば何にても好食せしなり。  
晩年に存び當所無縁の者なれば、速存生の内我  
像を當寺に建置程なく身まかりけると也。法名

は淨徳、元祿六癸酉歲正月十八日卒。意形の者た  
る故爰にあらはす

遊佐地藏蓮馨寺境内石佛立像 伊豆守殿家中  
遊佐將監墓也。領六百石住居石川喜四郎屋敷。其  
身仁愛深く廟の印とて石佛の地像を建る。誠に  
心の徳愛の理にて自然と願ひ有者尊敬すと。其  
事成就せずと云事なし。此遊佐氏は寛永の頃伊  
豆守殿に仕官、先祖は奥州遊佐の城主にて由緒  
たゞしき者、大力の勇士也。天草對陣の節もゆゑ  
しき働あり。今に其子孫豆州の家に有。



赤間川螢東明寺橋より高澤橋御茶下迄の邊  
大さ常の螢に倍す。群り飛ぶ事高七八丈ばかり、  
偏<sup>ヒヤシ</sup>火焰の如く、或は數百塊りて、水上に落散り、又  
は螢柱なととて、數百集り寄る事<sup>タテ</sup>豎る柱に等し。  
光、水面に移り、見る人、目を驚かす。風雨なく、晴れ  
たる夜は猶多し。毎年<sup>バウシユ</sup>芒種の節より十日前後甚  
た盛なり。誠に闇<sup>ヤミ</sup>を知らず、景色斜ならず。さりな  
から近年は當所繁華に従ひ、此邊も年々川拂あ  
りて、腐草稀にして今は昔の<sup>オモカゲ</sup>佛のみ残れり。  
辨天社南久保町今寺田氏屋敷 伊豆守殿家中

浅井權右衛門住居かのもの息女仙波辨天へ  
來りしに希有の事有依之屋敷内に此社を創立  
す委く仙波辨天縁起に有爰に畧。

安田深尾喧嘩の次第 寛永の頃、伊豆守殿家中  
安田大助年三十九才居住大工町今石川奎之助  
屋敷深尾佐太郎年二十八才居住宮ノ下今石川  
安兵衛屋敷十一月十六日の事なりしに兩人高  
澤町の場に於て、掛的の上口論に及び、差置がた  
き意趣を含み、今宵赤間川之り淵にて出逢へき  
田、佐太郎方へ申遣、大助は高澤橋の方より歩行、



本應寺裏門先に待請。佐太郎は五箇村の方より、  
是も期したる出立、之淵にて出合、互に詞をかわ  
し、切結双方はげしく戦勝負付さりけり。安田手  
疵十八ヶ所、深尾も手疵十一ヶ所、互にしばらく  
息つきて、大助數ヶ所の疵なから、兼て思ひ説け  
し事なれば、踏込て佐太郎か頬先掛切たをし、終  
に本意を遂けたり。然れとも大助左の股深手に  
て、中々進退心の儘ならず、唯片息にて居たる處  
へ、其頃御鳥屋ありて、御領差殺生の歸るさ、此躰  
を見て子細を問へば、しかくと語る。依て肩に

引かけ、漸本應寺脇まで退き、夫より寺中へたよ  
り、時に住僧安田が菩提所を尋けるに、漸く息の  
下より見立寺の由、答へぬ。即ち見立寺へ相渡す。  
早々安田一類掛付、切腹の望もあれば、急ぎ、從弟  
安田何某、介錯にて事濟ぬ。辻惣大夫といふ者、檢  
使を承りぬ。此大助は一眼にて、器量よき勇士の  
由、伊豆守殿深くおしまれたりと云。當所古き者  
は存たる事なから、其次第あらましを記しておく。